

福岡の祭りに見られる恵比須神と磯良神

吉田修作

序

恵比須神と磯良神はそれぞれには研究されてはいるものの、それら二神がどのように交叉するか、又、地域の祭りの中でいかなる神として登場しているかという視点では、あまり考えて来られなかった。本稿では、それらの神が地域の（特に福岡の）祭りの中でどのように受容されているかを考察してみたい。

一、玉せせり・十日恵比須と恵比須神

福岡県東区宮崎宮の正月三日に玉取り祭り、通称玉せせりという祭りがある。絵馬殿で陰陽二個の木玉の清めを行い、その玉を末社の玉取恵比須神社に移す。ここにおいて、この玉せせりが恵比須神に関わっていることが分かる。その恵比須神社で陽の玉がせせり手の裸の少年達から青年達に渡り、激しい玉の争奪戦が繰り広げられる。玉は手から手へと渡されながら参道を進み、やがて扉を閉ざした楼門の小さい窓から神官の手に渡る。その陽玉は陰

玉ともに神前に奉納される。神霊の宿る玉に触れるとその一年の幸福が約束されると言われている。

この玉せせりの陰陽の玉に関して、博多記に次のように記されている。

正月三日、玉採の神事は神功皇后三韓退治の時、龍神干珠、満珠の玉を献ぜし瑞相をかたどりしものなりと云ふ。雌雄の二顆あり。相伝ふ、明応三年正月元旦卯刻、博多上洲崎町に原田某ありて宮崎宮に詣で、汐井濱に打出で、遙かに沖の方を眺めしに、不思議や光明閃々として海上より浮来るものあり、能く之を覩れば、一對の珠丸の寄れるものなり、某拾ひ取り其の家に留置せしに、種々奇怪のことあるにぞ、同八年に於て某は其一顆を宮崎宮に納め、一顆を櫛田神社へ納むと言ふ。⁽¹⁾

右の記事で注目されるのは、まず、玉せせりの陰陽の玉が神功皇后の朝鮮出兵の際に海神が干珠・満珠の玉を献じたという、八幡愚童訓や八幡縁起によって流布された伝承を踏まえているという点で、このことは後述する。それは、宮崎宮が八幡宮であることから当然のことながら、恵比須神と混交している点で特異である。右の博多記で、明応三年の海上から寄り来る珠の言い伝えは、兵庫県西宮での恵比須神となる蛭子の出現、祭られ方と軌を一にしている。西宮の古伝説によれば、鳴尾の漁夫が和田岬の沖合で漁をしていた最中に、光り寄って来た蛭子神の神像を見つけて祀ったのが西宮夷神の始まりだ⁽²⁾という。要するに、宮崎宮玉せせりにおける玉の伝承は、神功皇后と恵比須神の二つの話が結びついたものと理解される。

福岡の正月の玉せせりは、現在では宮崎宮のそれが有名となったが、かつては「珠はやし」という行事として、玄海灘や博多湾に面した漁村で広く行われていた。宗像郡福岡町の「玉せり」もそれに相当する。玉せりの玉は新古二個あり、玄海の荒磯で清められた後、裸の男衆に担がれて本町の諏訪神社、津屋崎町の宮地嶽神社に詣でお祓いや神酒による清めを受け、相ノ浜の見える福岡海岸の海に向かい、玉を持った男衆が波しぶきを上げて走り、玉

を清める。その後、玉を持って町内を回り、厄払いと繁栄の祈願を行う。戦前までは一月十一日の行事であったが、現在では一月三日に催される⁽³⁾。かつての祭日が一月十一日であったというのは、玉せりが恵比須神の祭りであったことを物語る。

一月十日前後は全国的に恵比須神祭りが行われるが、福岡においても、博多区東公園の十日恵比須神社で、一月八日から十一日まで商売繁盛を願う十日恵比須祭りが行われる。『福岡県神社誌』は「社説に曰く」として十日恵比須神社の縁起を次のように記す。

香椎宮社家の子武内平十郎（後隠居して五右衛門と称す）博多に分家し、神屋と号して商業を営む。この者天正十九年正月三日年始に当たり、香椎なる父の家に到り、香椎宮、宮崎宮参拜の帰途、浜辺潮先に於いて恵比須大神の尊像を拾ひ上げ、之を自宅に奉斎せしが、後拾ひ上げたる地に御社を建て、氏の神と家運大に栄えたりと云ふ⁽⁴⁾。

当社の武内文書の十日恵比須神社記録写にも右とほぼ同様の内容が記述されているが、ただ拾い上げたのが恵比須二体となっている。これは前掲の宮崎宮の玉せりなどにおける玉二対の伝えが紛れたものか。いずれにせよ、正月十日の恵比須神祭りは、兵庫県西宮夷神社に始まり、大阪の今宮戎神社など関西地方に流行したものが江戸時代に福岡にもたらされて盛んになったものである。そして、十日恵比須神社は現在は東公園の一角に鎮座するが、明治十一年まではやや北寄りの崇福寺に隣接していたという。明和二年（一七六五）頃の著『石城志』には十日恵比須祭りの賑わいを次のように記している。

商家おほく宮崎松原崇福寺の傍にある沖の恵比須社に参詣す。又、散銭をば拝借するもの有、一文を売買目、拾文を拾買目と称す。翌年のけふに至りて、右の銭に倍の利を加へて返納す。夷は商神と称すれば、かかる事

を行ふなるべし。近年、此日参詣の群衆甚多⁽⁵⁾し。

ただ、西宮夷神社、今宮戎神社などの関西の恵比須神社が祭神恵比須神を蛭子神とするのに対し、十日恵比須神社は事代主神を祭神とする。「筑前統風土記」には「奥^{おき}の夷社」の項に次のようにある⁽⁶⁾。

崇福寺の東にあり。奥の夷とは事代主命を云。いにしへは大社にて、祭礼の折ふしは、御輿遊行などもありしとかや。今はわつかなる小社なり。

事代主命は、周知の如く、記紀の神話において大国主神の子として国譲りをする神であるが、その際に出雲の美保の関で鳥の遊びや漁をしていたことから、中世・近世には豊漁の神としての恵比須神とも見なされていった。美保の関にある美保神社は事代主神が祀られ、近世には海上安全神、豊漁守護神の信仰に加えて、福神恵比須神の本宮として知られるようになる⁽⁷⁾。或いは、近世の摂津志などにも、夷神を事代主神とする伝えを記している。従って、十日恵比須神社は、祭日の面では西宮夷神社、祭神においては事代主神を主とする美保神社の信仰の流れを受けて生成されたと言つてよい。尤も、福岡の中でも太宰府などでは、恵比須神を農業神として一月二十日に祭る地域もある⁽⁸⁾。

二、松ばやしと恵比須神

『石城志』は右の引用に続けて一月十日の項の最後に次のように記す。

又、松ばやしの恵比須のり初とて、石堂流れの町馬に乗せ、笛を吹、太鼓を打、引めぐる。

右の記事は、前述の十日恵比須神社に対して、御笠川を挟んだ対岸に位置する沖の夷社における行事に関するも

のである。『筑前続風土記』には「夷社」として次のようにある。

博多の北の海辺濱口に在。澳濱の夷の社は是也。(中略)昔は宮崎八幡宮の御旅所にして、八月十四日に此所まで神輿わたり玉ひしと云。櫛田祇園の神輿も、六月七日此所に渡御有て、十三日に本社にかへし奉りしと云。

右の宮崎宮からの神輿渡御の様を『福岡県神社誌』は宮崎宮の放生会の項で次のように記述している。

此大祭の神幸式は昔時極めて盛大なるものにて、毎年博多の課役として新船三艘を造り、それに神輿を奉じて供奉し、衣冠の装ひを輝かし、音楽の声を響かせて、海上を博多夷町の頓宮即ち今の大濱町の恵比須社に渡御の儀あり。

右の大濱の恵比須神社への神幸式は現在では行われていないが、ここにおいても宮崎宮と恵比須社との深い関わりが見てとれる。この恵比須神社は現、下呉服町の沖夷神社で、祭神は事代主、一説に蛭子だとも伝える。そして、その恵比須神社から今のどんたくに相当する往古の松ばやしの恵比須神は出現するのである。

松ばやしは室町時代に流行した正月の祝福芸で、『看聞日記』によると、正月七日から十五日にかけて、地下人、声聞師、観世猿楽などが、宮廷や將軍のもとを訪れ、めでたい祝言を述べ、風流の拍子物の歌舞や猿楽の芸を行ったという。博多松ばやしの最古の記録としては、『宗湛日記』文禄四年(一五九五)に遡るが、慶長四年(一五九九)に途絶、寛永十九年(一六四二)に再興され、明治中期以降は博多どんたくとして行われ、戦後は五月三日、四日に日を改めて松ばやしを先頭とする市民祭りとして、毎年多くの参加者、観光客を集める一大イベントとして親しまれている。現在は一月の十日恵比須と時期が離れているので、関連性が見出し難いが、右の『石城志』にあるように、近世においては、十日恵比須と松ばやしは連続性が認められ、特に恵比須神信仰の繋がりの中で注目される。博多松ばやしの恵比須神に関し、『博多松囃子考附』には次のように記す。

博多松離子に恵比須大黒福祿寿とて、貧者を雇ひて其の面を被らせ、其の衣装をつけて馬に乗せ曳きめぐる。

ここで注意されるのは、三福神とされる神に扮するのが貧者であったという点である。前述したように、都の松ばやしの担い手が声聞師達であったことを考慮するならば、当時蔑まれた宗教芸能者によつてもたらされたことの名残が、貧者に恵比須神などの三福神を担わせるという風習を生んだのではないか。⁽⁹⁾

その恵比須神は大きな鯛を携えた男神と、大きな玉を抱いた女神との二神登場するが、そのことについて『博多松離子考附』は右の引用に引き続き、次のように言及する。

此の恵比須の男女ある事、予は故有事ならんと思ひ、沖の恵比須は旧社と聞し故に、其の祠掌に問ひしに、神体は男女二柱にて座しますと答ふ。其の縁起を見るに、柴田成章が撰べる処にて、其の中に祭神蛭子又事代主、或説に男女の神像を安置するは大貴己命と少彦名命也、少彦名命は其の貌婦人の如くして、赤き装束して来臨し玉へる事、旧記に見へたるを、世人実に女神と心得るは誤り也と記す。

右の叙述で興味深いのは、祭神が西宮夷神社の蛭子神と美保神社などの事代主神と説く説と、大貴己命・少彦名命のペアとする伝えがあることである。ここにおいても、これらの恵比須信仰が西宮と美保神社など混交することで生成されていることが確認されとともに、更に、記紀の神話において海の彼方の常世に赴いたとされる少彦名神とも伝承されていくのは面白い。勿論、右の記述のように、それは古代信仰からみればあり得ない誤解に他ならないが、近世の書物には、恵比須神を少彦名神とする説も見られ、そういう説が右の伝えにも反映していることが考えられる。『博多松離子考附』は、恵比須神を少彦名とする説に異議を唱え、続いて柴田花守の『恵比須大神考』を引用して次のように記す。

我が大隅国始良郡帖佐町を巡講せしに、石祠ありて恵比須神をいつき祭れり。海幸をちかひ玉ふと云ふ、いと

古りたる木像男女二柱にして玉を持ち給へり、是穂々手見命と豊玉姫なるべし、玉は干珠万珠なるべし、里人の祈の礼代に玉となぞらへて、円き石を奉る事由緒ありと覚ゆ。

右の記載は、前掲の箱崎浜で玉せせりの玉を発見した言い伝えと状況的に軌を一にする。ただ、こちらでは玉を持った男女の木像で、それを記紀神話の穂々手見と豊玉姫になぞらえている点異なる。また、記紀神話では潮満珠・潮干珠たま しほふるたまとなつてゐるが、右は神功皇后伝承に従い、干珠・万(満)珠とする。尤も、潮満珠・潮干珠と干珠・満珠の差異は言葉上のことで、穂々手見の綿津見宮訪問神話と神功皇后伝承は、それらの珠をキーワードとして通底したと見なした方がよい。尚、恵比須神を穂々手見だとする説も近世の書物には記されるが、豊玉姫と一對とし、双方ともに恵比須神とする例を見ない。だからこそ、『博多松離子考附』もそれにこだわつてゐるのである。

一方、博多松ばやしには神々の言立てがなされ、恵比須神の言立てには次のようにある。

そもそも恵比須の祈りのかんなぎ来つては、宝の御船を作らんとて、大工小工を召されて、本より鍛冶は小工なれば吹屋を拵へ釘をのべ、本より大工は番匠なれば、鑿鋸錐手斧鉋のみのこぎりておのかんな、壺かねに規を追取り揃えて入り伐る山は何所々々ぞ。唐に仙嶋須弥仙島しゅみせんとう、蓬萊には方丈えいしうと申て、三つの山に分け入て、取木の木は何々々ぞ、千年経たる松の木、万年栄る楠、唐天竺の木なればとて、下には観音勢至の御立ち給ふては、割木なんぞを揃へ申して千代川せんたいがわへと押し下し、筏に丁度からくんで、筏の上乗りは、太郎の恵比須の召されて、西宮に漕ぎ寄て、(中略)鱸うなぎに八丁舳やちぢうに八丁、十六丁の櫓うしほを取て難波が浦へと漕ぎ寄せて、あぶらに留めるは藍の島、心に留まるは柏崎、乗りたりや替わぬ龍宮島、船押し出せば思ふ港に船が着く(以下略)⁽¹⁰⁾。

右の言い立ての内容は、宝の船を作ろうとして、須弥仙や蓬萊などの山に入り、その木を筏に組んで太郎の恵比須が西宮、難波、藍の島、柏崎、龍宮島に着くというもので、神仙思想に基づく須弥仙、蓬萊、龍宮などもある

が、西宮、難波などの実在の地名も見られる。西宮が語られるのは、やはり西宮夷神社を踏まえたものに違いない。空想上の地名が含まれているので確かなことは言えないが、西宮、難波、藍の島、柏崎などは恵比須神信仰の伝播に関わる地名ではないのか。特に、藍の島は、近世に半島と瀬戸内海航路を結ぶ交通の要衝であった新宮沖の相島の可能性がある。『筑前統風土記』には次のように記す。

今は藍島と称す。新宮湊より良の方、三里澳にある島也。福岡城下より海上七里有。島の廻り一里余有。日本紀神功皇后の紀に吾益みあきとあるは、此島の事なるへし。(中略)旅舶の泊る所なる故、韓使来朝の時、毎に国君より此所において饗接あり。其所なへ甚盛美をきはむ。

藍の島は、近世における朝鮮からの通信使節十二回の内、八回の逗留場所となり、右の『統風土記』の朝鮮通信使は一行四七〇人前後、釜山から対馬・壱岐を経て当地に渡り、瀬戸内海を経由して大坂へ赴いたという。この朝鮮通信使の通った航路は、近世における福岡と京阪を結ぶ主要な交通と考えられるから、兵庫西宮を根拠とする恵比須神信仰の伝播ルートとも重なるのではないか。このような状況を踏まえるならば、博多松ばやしにおける前掲の恵比須神の言い立てに見られた「藍の島」は、現在の相の島と考える蓋然性が高まる。尚、後述するように、那珂川町の岩戸神楽の歌の中にも「相の島」が歌われている。

三、神楽の「事代」と恵比須神

次に、福岡における恵比須神、或いはそれに関わる神の登場する別の祭りを見てみる。

那珂川町山田の伏見神社で、毎年七月十五日に行われる岩戸神楽の中に、「事代」という演目があり、『福岡県民

俗芸能』には以下のように記している。

舞人、一人、白狩衣、千早、白毛頭、烏帽子、事代面にて釣竿を持つ。

舞台装置。舞台の前面には能舞台に用いる竹で組み色紙を巻いた象徴的な船を置く。

楽の順序「嘉麻楽」のみ。

舞振り舞台に出で、船に乗り扇にて船を漕ぐ形をなして、歌あり。

西の海青海原に船出していとどうれしき釣をするかな

それより、釣竿をたれる、拝観者金銭を包んだ紙を、釣糸に競うて結びつける。糸、あます所なきまで、結びつけられる。入る。⁽¹¹⁾

右の演目は「事代」となっているが、前述したように、福岡では恵比須神を事代主神と見なすことが多く、又、その「事代」の所作が全国各地に広がりを持つ恵比須舞に通ずるところから、恵比須神に関わるものと考えてよい。近世の文献、例えば『阿波国風俗問状答』の正月の項には

夷廻、其体夷の人形なり。西の宮の夷子三郎殿、富貴を授くるの祝詞申候。(中略)夷舞とて、其体夷の面をかぶり、はりぬきの鯛と釣竿とを持申候。

などとある。尤も、これは西宮に発した正月の夷人形による舞だが、それらが各地の神楽に取り入れられ、隠岐や周防の神楽には鯛釣りの夷舞の演目が見られ、右的那珂川町伏見神社の岩戸神楽における「事代」もその流れを汲むもので、ここでも、西宮の夷神と事代主神との混交が認められる。

一方、那珂川町の岩戸神楽と同系統とされる、福岡県西部糸島の高祖神社に伝わる高祖神楽に「事代」ではないが、「国平」という二人の神の登場する演目があり、『高祖神楽鑑賞の葉』に次のように説明する。

天津神の御使、建御雷神が出雲の国に行き、葦原の中つ国を治める大国主命とその御子事代主命、建御名方神と交渉して、平和裡に国譲りの話し合いを纏めたという、有名な国譲り神話を神楽化したもの。交渉成立して事代主命が神楽歌を唱えながら釣竿を持ち暫く舞って楽屋に入ると、続いて建御雷神が退場する。この舞に登場する事代主命を、村人達は「鯛釣り恵比須さま」と呼んで、事代主命が参詣者の群れの中に釣糸を垂れると、人々は争って釣り糸の先に捧げ物を括りつける慣わしがあり、ひとしきり賑わう⁽¹²⁾。

右の「国平」の演目名は、江戸期の「高祖御神楽集」にも見え、その事代主の所作は、前掲の那珂川町の岩戸神楽における「事代」と同様で、しかもここでは、事代主が明確に恵比須神と認識されている。ただ、こちらは「事代」のような船の小道具は用いない。船の小道具は能楽の影響とも考えられる。

他方、北九州市小倉南区の高倉八幡神社で十月に行われる横代神楽では、「鯛釣りの舞」として釣糸の先に菓子などを吊ったりする。糟屋郡宇美町の宇美八幡神社の十月放生会では恵比須神が菓子をばらまいたりする演目を「蛭児舞」、同郡篠栗町の太祖神楽では同様の演目を「蛭子舞」としている。「事代」を含めて、これらの所作、演目はいずれも地域によるバリエーションで、ともに八幡系神社であるから、根は同系統のものと思なされるが、ここでも恵比須神を事代主神、蛭子神とする伝えが混在している。因みに、「蛭子舞」を行う宇美八幡神社境内の摂社の恵比須社は、祭神を事代主神とする。

いずれにせよ、右の「事代」や「蛭子舞」などは一人舞という点でも一つに括れるが、前掲の高祖神楽の「国平」は三人舞で国譲り神話を背景にしているという点において、趣を異にしている。このような国譲り神話の中に恵比須神が登場するのは、備中・備後神楽において見られるということを石塚尊俊が報告している。

出雲の影響を受けたといわれる備中神楽においては、これをこのままの形では取り入れず、「国譲り」の中の一

部分として挿入している。つまり武甕槌・経津主の両神が大国主のもとへやってくると、命は自分はよいがわが子事代主の思惑も聞かねばならぬと云って、稲背脛を美保の崎へ使いにやる。そこで恵比須が出てきて鯛を釣る。備後でも大体同様である。⁽¹³⁾

右の神楽における恵比須神は美保神社系の事代主神であることは明白だが、勿論それがそのまま高祖神楽に取り入れられたとは限らないことを一言言い添えておく。

四、神楽の「磯羅」

恵比須神が登場する演目に差異は認められるものの、前述したように、那珂川町の岩戸神楽と糸島の高祖神楽は全体的には演目に共通項が多い。その中で恵比須神にも関わるものとして注目されるのが「磯羅」である。「高祖神楽鑑賞の栞」の「磯羅」の項には次のようにある。

高祖神社の祭神であられる神功皇后が三韓征伐の時、この神に祈られ、出征を前に武内の宿禰にお命じになつて海わたつみのかみ神から、めでたく干珠・満珠の玉を借り受け、見事に勝戦を納められた神話を神楽に仕組んだもので、武内宿禰、志賀住吉神、豊姫、海神の神々が登場、フィナーレは武内大臣と豊姫が、次の歌を唱和しながら舞い納める。

息長足比女命神の命に海神わたつみの二つの玉を奉りける

右の「磯羅」の演目も江戸期の「高祖御神楽集」に記されており、又、現在でも毎年行われているが、岩戸神楽では演じられなくなっている。「福岡県民俗芸能」に岩戸神楽の次第が記録されているので、「磯羅」の項を一部抜

粹して次に引いてみる。

舞人四人、其の一 武内大臣、其の二 志賀大明神、其の三 豊姫、其の四 綿津見磯羅、狩衣、千早、黒大毛頭、黒の鬼面。

(武内に呼び出されて志賀大明神登場し歌う)

月さえて山静かなる今宵かな神楽の音に志賀の明神

武内……神功皇后、異国征伐の御舟玉体をも学ばせ候ばや

志賀神舟に乗り棹をとりて歌をうたひ……

志賀の海かつまが沖に舟出していとど嬉しき相の島かな

(明神退場、武内と豊姫の問答)

武内……神功皇后異国征伐の宝、干珠満珠の両顆借り得させたまふ所を学ばせ候ばや。

(豊姫と綿津見が干珠満珠をめぐる問答)

(綿津見神屏風の上より隠現して青赤の満珠干珠を両手に持つて出す。豊姫扇を開いて之を受けんとする。惜しむが如き身振り数度、綿津見やがて舞に魅せられ、遂に与ふ。豊姫入る。綿津見(磯羅)舞台に出で来りて、勇壮に舞いながら退く。)

右の次第を見る限りにおいては、現行の高祖神楽の「磯羅」とほぼ合致する。周知の如く、これらの神楽次第は八幡愚童訓などの八幡縁起に基づいており、八幡愚童訓によれば、次のようにある。

住吉神と武内大臣が相談し、舵取りとして安曇磯良を呼び出そうとして神楽を行うと、磯良が海中から出現し、余りに顔の悪き事を恥給けり。浄衣の袖を解て御顔を覆て、御頸に鼓を懸けて細男せいなうと云ふ舞を舞給けり。さて

こそ今の世までも、細男の面には布を垂たり。⁽¹⁴⁾

とする。続いて、その磯良を舵取りとして、神功皇后は妹の豊姫に命じ、娑竭羅竜王の持つ旱珠・満珠を取りに遣わし、首尾良く二つの珠を得たという。そして、登場する者について次のように書き加える。

豊姫と申すは、河上の大明神の御事也。安曇磯良と申すは、筑前国にては鹿嶋大明神、常陸国にては鹿嶋大明神、大和国にては春日大明神と申けり。一体分身、同体異名の御事也。

右の伝えでは、舵取りの志賀大明神磯良と二珠を授ける竜王となっているが、先の神楽では、舵取りの志賀大明神と二珠を与える綿津見神磯羅という具合に、神格の異同が見られる。それとともに、愚童訓の磯良が白覆面で舞うのに対し、神楽の磯羅は黒の鬼面で舞うというように、扮装にも差異が認められる。勿論、神楽は八幡縁起の忠実な再現ではないので、八幡縁起と神楽とのずれが生じることも充分にあり得る。

この場合、磯良は綿津見神、或いは竜王の使わしめと考えられるから、神楽で綿津見神と磯良が一体を見なされても不都合はない。また、江戸期には福岡各地に社家神楽の座が設けられ、それらが相互に関わり合うネットワークが存在していたようで、「櫛田宮記録」の中の神楽演目の中にも「磯良」など、高祖神楽、那珂川の岩戸神楽に共通する演目名が認められ、⁽¹⁵⁾ 神楽の演目は神社やそれらの縁起とは別の範疇で考察する必要がある。

一方、志賀島においては、磯良が白覆面をして舞う「羯鼓の舞」が、現在でも九月の神幸祭に行われている。

1、紅布にて 鼓を胸高に吊る。2、白布にて覆面をする。3、バチを手に取る。4、一礼。舞のうの岸の姫松や、唱えながら右廻りに一度廻って正面にて一打。一礼。また岸の姫松や、を唱えて右廻りに一度廻って正面にて一打。一礼。もう一度、同じ動作を繰り返す。すなわち三遍やる。⁽¹⁶⁾

右の「羯鼓の舞」と同系統のものが、春日若宮おん祭の演目の一つ「細男舞」として演じられていることは周知

の通りである。或いは、大分県境の福岡県吉富町古表神社と、隣接する中津市伊藤田の古要神社において、四年に一回行われる放生会に奉納される人形による「細男舞」^{くわしお}も、それらの流れを汲むものとして知られている。ただ、古要神社のその舞人形の顔には白覆面をするが、古表神社の方は覆面を用いないという差異も認められる。古表神社の熊谷宮司によれば、古要神社も元は覆面をしなかったのに、八幡縁起などに照らして覆面を付けるようになったという。これら両神社の「細男舞」の覆面の有無はどちらが本来的か決め難いが、これら両神社の細男人形舞は、宇佐宮八幡御託宣集などに基づいて、中世には宇佐神宮の放生会に参加していたことが確認される。

古表神社、古要神社の「細男舞」の白覆面について、野村伸一は後藤淑などの説を援用して、死霊を示すものと見なしている。更に、野村は古要神社の人形の舞手がオドリコと呼ばれていることから、それらの人形の舞手ともとは自ら舞ったのではないかと指摘する⁽¹⁷⁾。この指摘は、古表神社、古要神社の人形による「細男舞」と、人間が行う志賀島の「羯鼓の舞」や春日若宮おん祭りの「細男舞」との接点を探る手掛かりとなる。それとともに、夷舞において、人形舞としてのそれと、前述したような松ばやしにおける人間が扮する夷神とが地続きであろうことを示唆するものともなる。

ところで、志賀島では「羯鼓の舞」に先だって、竜の頭を象ったものを持って舞う「竜の舞」が行われるが、高祖神楽や那珂川の岩戸神楽に見られるような、磯良が早珠・満珠を献上するという演目はない。前記の二神楽の「磯羅」は二珠献上が眼目となっており、その面で、二珠を海から見出して祭るという前述の恵比須神信仰に通底していることは注目される。これなども、福岡における恵比須神と磯良神の接点と言える。

五、磯良舞と神社縁起

次に磯良舞と各神社との繋がりを検証する。

志賀島の志賀海神社と磯良の繋がりについては、前掲の八幡愚童訓などの八幡縁起に基づくもので、神社で正月二日に謡い初めする「わたつみ志賀島」という謡曲も八幡縁起を翻案したものである。また、宮司の安曇氏は、古事記においては祖神を綿津見神とするが、現在の言い伝えでは磯良を祖神とし、宮司家は代々安曇磯某との名を継承しているという。ただ、釈日本紀所引の筑前風土記には別の伝承が記されており、要約すると次のような話である。

昔、神功皇后が新羅に行幸の際に志賀島に停泊し、従者小浜に火種を求めさせたところ、小浜が火種を持って来て、この嶋と浜は続いていて同じ地域だったと報告した。これによってその島を近の嶋と名付け、今は訛って資珂の嶋という。

右の伝えは神功紀に別伝も見られるが、八幡系の磯良の登場するものとは別系統のものである。『筑前統風土記』は、古事記や風土記の記載を重んじて、磯良に関する言い伝えは土地の人の勝手な伝えだと断じているが、中世・近世以降、磯良伝承が流布し定着していったことを考慮するならば、無下に磯良伝承を退けるわけにもいかない。いずれにせよ、記紀の神功皇后の記事には見られないが、中世以降、志賀島は神功皇后伝承地の中に組み込まれていった。

一方、那珂川町伏見神社周辺は日本書紀神功皇后条の記事に由来する。

皇后、……躬みずから西を征たむと欲し、爰こゝに神田を定めて佃たぐりたまふ。時に儼な河の水を引き、神田を潤さむと欲

し、溝を掘り迹驚岡（とどろきのをか）に及びしに、大磐塞（いはよきが）りて溝を穿（うか）つことを得ず。皇后、武内宿禰を召し、劍・鏡を捧げて神祇を禱（の）祈（の）ましめて、溝を通さむことを求めたまふ。則ち当時に、雷電霹靂（かむとけ）して、其の磐を蹴（け）る裂きて、水を通さしむ。故、時人、其の溝を号けて裂田溝（さくたのうなで）と曰（い）ふ。⁽¹⁸⁾

古典文学全集本の頭注などによれば、右の灘河は那珂川、迹驚岡は那珂川町伏木神社のある山田に隣接する安徳に比定されると言う。勿論、神功皇后が神話的人物であるから、右の記事は事実とまでは言えないにせよ、何らかの歴史的背景があつたことは考えられる。

『筑前統風土記』においても、迹驚岡、裂田溝などを右の神功紀を引いて説明している。更に、同書の「伏見大明神社」の項には、

此社始は肥前の川上大明神を祭る。神功皇后の御妹也と称す。後に山城伏見の御香宮（こかうの）を勧請して合せ祭る。故に伏見大明神と云。

とある。前掲したように、川上大明神として祭られた神功皇后の妹は豊姫とされるから、豊姫が登場する神楽の「磯羅」は、祭神の行う演目として重きを置かれていたはずである。

他方、糸島の高祖神社は、三代実録元慶元年（八七七）九月二十五日条に「筑前国正六位上高磯比咩神に従五位下を授く」と見える高磯比咩神を祀つた所とされ、江戸時代の『筑前国統風土記附録』には高磯比咩神社と記されている。貝原益軒の手になる元禄年間の神社縁起には、天津日高彦火々出見命（ほほでみ）が綿津見神から潮満珠・潮早珠を得たという記紀の神話と、神功皇后がその二珠の助けによって新羅に赴いたという八幡縁起とが結びつけられ語られている。高祖神社の名の由来について、同縁起には彦火々出見命が天皇の祖先神に相当する故に名付けられたのだという。⁽¹⁹⁾ 因みに、神功皇后記（紀）においては、二珠でなく、多くの魚の協力を得て新羅へ渡つたと記されている

が、二珠を接点にして、彦火々出見神話と神功皇后神話が重層していくのは必定で、高祖神社縁起はそのことを端的に示している。そのような神社縁起を踏まえた高祖神楽の「磯羅」も重要な演目であることは疑いが無い。尚、高祖神社の祭神は現在では、彦火々出見命、玉依姫命、息長足姫命とし、高磯比売神は除かれている。

結

右に述べたように、綿津見神からの賜り物である二つの珠をキーワードとして、彦火々出見神話と神功皇后伝承は連結し得た。逆に言えば、八幡縁起などにおける神功皇后の神話化の生成過程において、彦火々出見神話を取り込まれたとも言える。その一方で、近世において、恵比須神が彦火々出見であるという言い伝えも存在した。そして、本稿の初めに取り上げたように、福岡の祭りや神社の由来において、恵比須神が二体海中から見出されて祀られたという伝えがあった。これも前述した如く、恵比須神が二体という伝えは、他にあまり例を見ない。その一方で、福岡の神楽の磯良神舞において、海中の二珠が献上されるという演目が行われている。福岡におけるこれら恵比須神と磯良神信仰は連動しているのではないか。即ち、それらは神功皇后伝承の中で語られているという特徴を有し、北部九州一体に広がりを持つ神功皇后伝承、或いは八幡信仰の流れの中で、恵比須神と磯良神の混交がなされていったと考えられる。

その面では、それは福岡に限定されるものではない。対馬豊玉町仁位の和多都美神社には、社前の渚に「磯良エベス」という霊石が御神体として祀られており、その霊石の名称からして、磯良神と恵比須神を一体化したものである。当神社の由緒には、彦火々出見神話が語られ、現在の神主の国分家は磯良舞を伝えていたとされるが、

今は行われていない。当社のかつての宮司は長岡家で、中世文書も保持しており、志賀島の安曇氏から分かれたともいうが、今は当社と志賀島の繋がりは見られない。

対馬には別に峰町木坂に海神社が存し、中世文書には木坂八幡宮と記され、神功皇后伝承と彦火々出見神話が混在して伝わっている。永留久恵によれば、対馬の祭祀では、神功皇后と彦火々出見命の妻豊玉姫とが重なっている例が多いという。⁽²⁰⁾

このように、本稿で扱った恵比須神と磯良神の交叉は、福岡に限らず、他の地域にも及ぶことであるが、それら関しては稿を改めることとし、以上をもって擲筆する。

注

- (1) 『福岡県神社誌 上巻』(昭和63・1) 24ページ。
- (2) 吉井良隆編『えびす信仰事典』(戎光祥出版 99・3) 73ページ。以下同書の引用はこれによる。
- (3) 『祭礼行事 福岡県』(桜楓社 平成5・2) 62ページ。
- (4) 前掲書(注1)下巻 33ページ。以下同書の引用はこれによる。
- (5) 津田元願・元貫『石城志』(昭和52)。以下同書の引用はこれによる。
- (6) 貝原益軒『筑前続風土記』(文献出版 昭和63・6) 113ページ。以下同書の引用はこれによる。
- (7) 谷川健一編『日本の神々―神社と聖地7 山陰』(白水社 85・8)の「美保神社」の項。
- (8) 吉田「エビス神と宰府詣り」(『都府楼』平成11・10)。
- (9) 『博多どんたく史』(04・4) 234ページによる。
- (10) 博多松ばやし保存会編『博多松ばやし』(昭和47・3)による。
- (11) 平井武夫・筑紫豊編『福岡県民俗芸能』(文献出版 昭和58・11) 91ページ。

- (12) 高祖神楽保存会編『高祖神楽の葉』。
- (13) 石塚尊俊『西日本諸神楽の研究』（慶友社 昭和54・5）165ページ。
- (14) 『神社縁起』（日本思想大系20 岩波 75・12）173ページ。
- (15) 佐々木哲哉「筑前社家神楽と伏見神社の岩戸神楽」（『岩戸神楽福岡県無形民俗文化財指定三十五周年記念誌』）。
- (16) 『福岡県文化財調査報告書』二十四輯。
- (17) 野村伸一「祭祀儀礼と人形戯―放生会に奉仕するくぐつ舞」（高麗大学民族文化院民俗学研究所国際学術大会 東アジアの人形戯（I）での口頭発表 03・9・27）。
- (18) 『日本書紀1』（日本古典文学全集 小学館）。
- (19) 『神道大系 神社編 筑前他』（昭和57・10）188ページ。
- (20) 『日本の神々―神社と聖地1 九州』（白水社 84・4）。